

扉 を 開く INTERVIEW

綾戸智恵

AYADO Chie

ジャズシンガー

四〇歳で遅咲きのデビューを果たして以来、ジャズシンガーとしては異例のCDセールスを記録している綾戸智恵さん。ピアノ弾き語りのコンサートでは笑いあり涙ありのトークも交えて聴衆を魅了する。「私の生きざまが音楽になっている」という綾戸さんは、どのような道をたどって今に至るのか。その生きざまを支える信念は、亡き母の教育の賜物だったと語る。



私の人生観を支える「母の言葉」

個性を伸ばしてくれた母、 音楽を授けてくれたシスター

——綾戸さんは小さい頃、どんな子どもでしたか。

綾戸 母が私を縛らなかつたら、いろんなことに興味があつて、とにかくミスを怖がらない子でした。「間違つたらどうしよう」というのは子どもの頃から一度もないですね。「やつてみな分からへんやん」が学校でも有名な私のフレーズでした。みんなにウケることも大好き。踊りを披露して「智恵ちゃん」と拍手をもらつたり、お弁当の卵焼きをあげて「おいしいわ、あなたの」とほめられたりする和有頂天になりやすい。「煙と智恵ちゃん」は手をたたいたならな

んぼでも上る」と言われました。

母のスタンスは一貫していて、先生から「これはみんなと一緒にして」と言われたときに、母が「協調性が大事なのは分かりますけど、この子の個性をそぐことだけはやめてください」と、お願いしてくれたことを覚えています。「今はこれがこの子の欠点かもしれないけど、大人になつたときにはチャームポイントになるかもしれない。人生が答えをつけることやから自由にやらせてやってください」って。

——昔前は個性や違いよりも協調性を重んじる傾向がありました

したが、その点、お母さまは進歩的だったと感じます。

綾戸 母は大正十四年生まれのわりにはしゃれていましたね。長身で美しかったです、普通に世界を見ていた人でした。戦時中に「日本は負ける」と言つたりして、警察に囲まれたこともあつたそうです。母も親からの詰め込みがなかつたんですよ。母方の祖父が自由な人で。

——音楽との出会いはいつ頃ですか。

綾戸 私はおむつが取れてすぐに三年保育の幼稚園に行つたんです。フランス系カナダ人のシスターがたくさんいる、カトリック教育の幼稚園。ベレー帽の制服に「パリジャンみたいでええな」と母が憧れて。完璧なミーハーですね。そこで英語の

授業のほか、芸術の授業も取れたので、私はクラシックピアノを選んだんです。幼いながらに外国人に気後れしなかつたし、幼稚園の共通語だった英語は音楽みたいに頭に入ってきたと思います。歌も、ゴスペルからカンツォーネに至るまで歌っていました。今の私の「アメイジン・グ・グレイス」というと、当時、幼稚園のシスターが歌っていた歌い方に影響されています。あのシスターの独特のフレージングとか、私の中に残っているんですよ。譜面はあまり得意ではなく耳コピというか真似をしながら歌っていました。それが得意でしたね。

——そして、その音楽でウケると。

綾戸 小学校でも、みんなの前

でピアノを弾いたりして。ピアノを始めた頃から、一度聴いた音楽は瞬時に再現できました。「てなもんや三度笠」とか、パツと弾いてみせると、みんながワッ！となって。あれは嬉しかったですね。

中学生の頃には大阪万博があつて、天王寺とか阿倍野のピアノバーに外国人がたくさん

花も嵐も踏み越えて 受け入れたデビューへの道

——高校三年の頃、初めてロサンゼルスを訪れ、その後も渡米を繰り返されます。このときも音楽修業が目的ではなかったのですか。

綾戸 いいえ、アメリカで暮らしてみただけです。本当にそれだけ。小さい頃、父に何度も洋画座に連れて行かれた影響でアメリカが好きになつて、マリリン・モンローやらロック・ハドソンみたいな人がたくさんおると思っていたんですよ。行った

来たんです。そこで演奏すると「明日も来て」とお座敷がかかる(笑)。これで将来ごはんが食べれるようになるかもしれないと、そのぐらいは思いましたけど、まさか今のようになるとは思っていませんでした。実は私、四〇歳でデビューするまで、プロになるために励んできたことは何もなくつたんです。

ら、ケンタッキーフライドチキンのロゴマークみたいなおっちゃんばかり(笑)。アメリカも、日本と何ら変わらず老若男女が暮らしているんだなと分かりました。

——夜はジャズクラブに通い、飛び入りでジャム・セッションに参加されたそうですね。

綾戸 修業とか勉強という意識はなく、ただ楽しいからやらせてくれという感じですね。アメリカの音楽は、いろいろな国の人が各々の音楽を持って集まっ

てきたものですから、「こうでなければ」というのがないんです。自由や気ままさがありますし、百点が満点とは限りません。だから良い意味の博打感ばくちがあつて楽しい。一発当てて儲けてやろうというのとは違いますよ。

博打の楽しさつて、当たるか当たらないか。お客さんにウケるかウケないかです。スベったときは自分で自分を笑います。音楽もしゃべりも、思いついたことをどんどんステージでやれるんです。

——一九九一年、三三歳の時に生後六カ月の息子さんと帰国し、お母さまを含めた三人の生活を神戸で始められました。

綾戸 独り者のときは食べない日があつても平気でしたけど、幼い息子と年老いた母がおなかすいたと言ったらがんばらなアカン。クラブで歌つたりするだけじゃなくて、自分で貼り紙をして英語やピアノの先生をしたり、近所の外国人に日本料理を教えたり、できることは何でもやりました。もちろん家の中で

は主婦業、母親業も。その頃はまず食べることで、人生のプランというのはなかったですね。

——一九九五年の阪神・淡路大震災で被災されましたが、それで人生観に変化がありましたか。

綾戸 「生まれたら、もれなく死ぬのがついてくる」と、母から私は言われ続けてきました。私が三歳そこらの物心ついた頃からです。オギャーと生まれた人には大きな仕事がもう一つ残っている、それは自分の葬式やと。そして、生きてる間にいろんなことが降りかかってきても、とばかりと思わず、それが人生やと思いなさいと教えられました。台風でも地震でもぶち当たったときは「あ、来ましたか」と受け止める。逆に、来るもの来るものを自分のチャンスだと思つて受け入れなさいと。花も嵐も踏み越えていけと言われましたね。

——そうした人生観もあつたから、四〇歳でデビューのきっかけになったスカウトも……。



あやど・ちえ ● 1957 年大阪府生まれ。3 歳からクラシックピアノを始め、高校在学中の 17 歳で単身ロサンゼルスへ。高校卒業後もアルバイトでお金を貯めては渡米し、ジャズクラブに通った。ときには飛び入りで演奏、歌を披露し、ジャム・セッションに参加。84 年、27 歳の時にニューヨークに渡り、以後長期滞在。98 年、40 歳でジャズシンガーとしてプロデビュー。アルバム『For All We Know』『Your Songs』を発表。99 年、初のソロアルバム『LIFE』が大ヒット。2003 年には NHK 紅白歌合戦に出場し「テネシー・ワルツ」を歌い話題に。その後、活動しながらも介護を続け、21 年に 94 歳の母を自宅で見取った。ライブ活動では、ジャズを中心にゴスペル、ソウル、ロック、ポップス、J-POP など幅広いレパートリーを巧みにとり入れた個性的なステージを展開している。2001 年に第 51 回芸術選奨文部科学大臣新人賞（大衆芸能部門）受賞。コロナ禍でも精力的にアルバム制作をすすめ、22 年 12 月にスタジオレコーディング作品としては 5 年ぶりとなるアルバム『Hana Uta（はなうた）』をリリース。近年は、YouTube での自宅弾き語り動画「ジャズバーまいど」、Podcast「綾戸智恵のばば放談」など SNS での活動が大好評。着実な歩みを続けている。

綾戸 全部受け入れたんです。

最初の二年ぐらいは「これだええんやろか？」と思いつながらの音楽活動だったんですけど、ソロアルバムを出した頃から「お客さん、こんなに入ってるやん！」と、びっくりするような状況になってきました。ツアーデイズだったのに追加公演、渋谷にあるオーチャードホールでも追加公演……とか。そんな状況になったときに母から言われた

んです。「誰があんたをのし上げたんや。お客さんや。それが分かってるなら、どないでも勝手にいい」と。お客さんにこれだけ大事にしてもらえるなら、私は歌わなあかんと思うようになりまして。自分は音楽の才能があるわけではないけれど、ウケたんだから、これをやっていかなもつたないないし、どぶに捨てるようなことをしたら生まれたことを否定するのと一緒にだと

思ってたんです。

母には「あんたがお母さん業をやめたら歌えなくなるよ、人間として失格やから」とも言われました。息子の弁当を作ったり、体操服にゼッケンを付けたたり、その合間にピアノを弾いて練習する。そんな毎日でした。

——綾戸さんのコンサートで印象的なのは、「歌います」とは言わずに「聴いてください」と語りかけられることです。

綾戸 お客さんが私の歌を聴いて喜んでくれるって、それで私はごはんが食べられるんですか

ら。ともかく息子と母を食べさせたくて、根っこはずっとそこにありました。自分がミュージシャンでありたいといった気持ちにはなかったんですね。それに、自分が歌いたいか、私利私欲だけでは自分を何もコントロールできません。子どもを大きくせないかんとか、歌を聴いてくれる人に喜んでもらわないかとか、そう思う気持ちから、人としての動きがきれいになる。自分をコントロールできる。それさえできれば、人間生きていくんですかね。

「今日までご苦労さん」 母が遺した最期の言葉

——デビューから一〇周年を迎えた二〇〇八年、音楽活動を一時休止してお母さまの介護に力を注がれました。翌年に復帰後も介護を続けて、二〇二一年に九四歳で看取られました。

綾戸 母なのでほっとけなかつた。ただそれだけのことです。介護用品のテレビCMに出演し

たせいか、私は介護の名人みたいに言われますけど、そんなじゃないです。普通にくだばったり、日々波がありました。みんなの力もたくさん借りました。困ったときは、周りの人にすぐに頼みます。夏の暑い盛りに母の車椅子を押して坂道を登っている途中、忘れ物に気付いたこ



キリスト品川教会でのライブの様子

(写真提供：有限会社まいど)

とがありました。この車椅子を押してまた坂を上り下りするのは嫌やなと思案していたら、近くに郵便局があったので、「すみません、ちょっと見てもらえませんか」と駆け込みました。局員さんが「は？」という

間に母を置き去りにして忘れ物を取ってきて、すみませんでした。切手だけは買って帰りましたよ。

そんなふうに、頼めるんだったら何でも「ごめんなさい」でやっていました。「ごめんなさい」で済むことだったら、人間お互いさまやから、自分の仕事でそれを返そうと思ったんです。だから、私は介護を特別にできたわけでも何でもない。がんばりましたけど、よその娘さんと何ら変わりません。

—— 周りを巻き込んだり信頼関係をつくったり、とてもお手だと感じます。

綾戸 無意識のうちに母にそういうふうに着てられたんでしょね。それは感じます。

自分の手足は二つずつありますでしよう。それ以上のことを誰かとやっていくことが大事なんです。手と足と、自分が今持っている肉体のすべてを使って、それで足らなときはどうするか。口ですやん。「お願いね」と言う。ここが一番大事なことを

で、共存するということです。共存ができたから、私は母を介護しながらでも仕事ができしました。私が歌いに行っている間、ある介護士さんが実の娘みたいにお母のお世話をしてくれた。私がコンサートに行かなあかんと、介護士さんというもう一つの手が、母の背中をさすってくれたわけです。彼女には本当にお世話になりました。だから私は今、その介護士さんに対してできる限りのことをしていますね。

—— 綾戸さんにとってお母さまはどういう存在でしたか。

綾戸 ずっと私の後ろ盾ですね。一七歳で単身渡米したことについて、「綾戸さん、そんな年齢で自立できていて凄^{すご}い」と言われましたけど、母がいなかったら行つてません。何かあっても母がいてくれる、そういう気持ちがあったから一人で行けたんですよ。

小学三年生の頃、かけっこで初めて母より速く走ったことがあります。早く、負けた

わ」と言いながらも、母の横顔に、どこか私に負けた喜びが見えたんです。これは親だけですね。その時、私は、自分が大きくなつてることを実感するとも、いつか母は死ぬんだなと感じていました。

そう思いながら生きてきたので、母が最後に「今日までご苦労さん……」と言ひ、私も「お母ちゃん、ご苦労さん」と返したのを覚えています。それから、母のことで泣いた日はありません。葬式は大笑いでしたね。私のワンマンショーやと言われました。

オギャーと生まれた人のもう一つの大きな仕事は自分の葬式やと母は言いました。そやけど死というのは本人には分からないでしょう。私が母の葬式をしたくなるような子に母はしたんです。その「成績」は母のもんです。そう思います。そんな実感があるんです。

—— 本日は、ありがとうございます。

(聞き手／情報サービス局長・小牧義弘)